



ACP

チャイルド
アクティブ
プログラム
クリニック

監修:佐藤善人
(岐阜聖徳学園大学教育学部准教授)



第12回 連載総まとめ座談会

子どもたちへもっと遊びを！ 環境づくりとACPの可能性

本連載において、“遊びの伝道師”佐藤善人先生に、実にさまざまな遊びを紹介していただいた。今回はそんな3年間を総括する「ACP座談会」を行った。佐藤先生をはじめ、東山スポーツ少年団（剣道）の吉田繁敬先生、日本体育協会の青野博研究員、さらにスペシャルゲストとして元バレーボール選手の大山加奈氏をお招きし、ACPの現状と可能性についてお話いただいた。



佐藤善人先生

岐阜聖徳学園大学教育学部准教授。本連載では“遊びの伝道師”として、全国のスポーツ少年団に遊びを紹介している。

青野 今回の座談会では3年間にわたるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）クリニックの連載を振り返り、ご意見や感想、今後ACPをさらに普及させるために何が必要かといったことを話しあえればと思います。

佐藤 早速ですが大山さんは子どもたちのころ、外で遊んでいましたか？

大山 私は喘息がひどく、ほとんど外で体を動かして遊ぶことがなくて、家でお絵描きばかりしているような子どもでした。

佐藤 意外ですね！ 僕が子どもたちのころはテレビゲームなどもあまり普及していなかったのですが、ACPで教えているような遊びを外でしていました。そういうベースがあるから僕も周りの友達も運動を好きになっていった。でもいまの子どもはなかなか外で遊べません。昔は近所のお兄さん・お姉さんが

教えてくれたけれど、いまの子は大人がこういうプログラムをつくって教えないければ遊べない。子どもに遊びを取り戻そうというコンセプトで、結果的に体力がつき、スポーツが好きなことにつながればいいな、というのがACPの取り組みです。

青野 ACPを執筆される際、佐藤先生はどんなことに配慮されたのでしょうか。

佐藤 基本的にはできるだけ道具が少なくて、または必要のない遊びを選びました。あとは集団でできるもの、ルールが簡単なもの。子どもは自由度がないと飽きてしまいます。ここにあるものをこの通りにやりましょう、では窮屈に感じる。もう一つは僕自身が遊んで楽しかったものですね。

吉田 大山さんがバレーボールを始めたのは、地域のクラブチームですよね。

大山 はい。3つの小学校が集まったチームで、小学2年生のときに始めました。一番小さい子は幼児からいましたね。

吉田 ほかの子は何か遊びをやっていたか。

大山 みんなバレーボールばかりでした。幼児もアンダー・オーバードパスとか、最初からバレーボールの練習で。練習がない日も、うんていをネット代わりにしてバレーボール遊びをやっています。

佐藤 バレーボールをやったことで、何が一番変わりましたか。

大山 気持ちが変わったことが大きかったと思います。妹は体が丈夫で運動も得意だったので、妹が先にレギュラーで試合に出ている姿を見て、私も負けていけない、と。もう一つは友達ができ、絶対に会話が生まれる。それまで

は妹くらいしか話をする相手がいりませんでしたから。

本来は遊びIIプレイ 先入観を打開するために

青野 本連載の1年目では、吉田先生が指導されている剣道の東山スポーツ少年団にACPを紹介し、密着取材してきました。武道に遊びを導入することに関して、抵抗はありませんでしたか。

吉田 団の代表指導者が理解のある人だったので抵抗はなかったの



吉田繁敬先生

愛知県体育協会職員、東山スポーツ少年団(剣道)指導員、心理カウンセラー。幼児版ACPのワーキンググループメンバーとしても活動中。

番苦労されたことは。
吉田 遊びII不真面目という先入観を打開するのが大変でした。スポーツの現場に遊びが入るのは何か違う、という感覚の人が多かった。だから、あえて「ウォーミングアップ遊び」と言ってみたり。

佐藤 英語で遊びは「プレイ」です。歴史家のヨハン・ホイジンガは、「遊びは文化より古い」と言っていますし、本来は遊びがもたらす。スポーツは完成された形で西洋から入ってきて、日本人はそれを受け入れたわけですが、どこかスポーツの方が崇高なものという感覚がある。でも本来、欧米の人にとってはバレーボールだつてサッカーだつて真剣な「遊び」なんです。日本ではそういうことがきちんと教えられていない。体育の授業だつて上手なら評価が高い。だからうまい子だけが認めら

れる。うまくなくても楽しんでいける子を認められるようになれば、遊びに対する理解が深まり、スポーツの裾野も広がっていくと思います。
大山 中学校、高校時代の私の恩師が一番大事にしていたのは「バレーボールを嫌いにさせずに卒業させる」ということで、レギュラーでない子のこともすごくよく見てくれていました。

遊びを通して

成功や葛藤を経験できる

青野 ACPを継続的に実践するうえで吉田先生が苦慮されたことはありますか。

吉田 子どもが新しい遊びを求めてくるのに対して応えられないのが嫌で、「頑張りすぎてイライラしていた時期がありました(笑)」。ACPを続けるコツは、遊びをアレンジすること。ルールが単純な



大山加奈さん

元バレーボール選手。小学2年生よりひまわりバレーボールクラブ(東京都)で競技を始め、全日本代表としてアテネオリンピックなどを経験。現在は解説者やタレント、指導者として活動中。

遊びが一番効果的だ」ということです。試合に勝つことも大事ですが、それ以上に大事なことは、運動が得意な子も得意でない子も運動が好きになるように導くことです。そのために、ACPを使っていくんですよ。

青野 ACPを取り入れる際、一



青野博 研究員

日本体育協会スポーツ科学研究室研究員。ACPの研究・啓発活動に取り組んでおり、今回の座談会の司会進行役。

遊びほど盛り上がりませんが、すぐに飽きてしまう。しかし、同じ遊びであっても、ちよつとしたアレンジをするだけで盛り上がり方が変わる。ポテトチップスと同じで、塩味にしたりコンソメ味にしたりギザギザカットにしたりするだけで、飽きずに楽しめるみたいないイメージですね。相手をタッチする

ときのコールをおもしろくするだけで、子どもたちは喜びますから。

佐藤 自分の子どもを振り返っても、好きな遊びをずっとしてはいたから。大山さんにとってのバレーボールもそうだったと思います。新しいものを与えられなくても、楽しいから何ら問題ないんです。

青野 スポーツ少年団特有のリーダーや育成母集団に対しては、特別な働きかけをされましたか。

吉田 最初はリーダーの中学生、高校生に「遊んであげて」とお願いしていたのが、最終的には子どもがリーダーたちをその気にさせていました。遊びにリーダーが入ると、子どもたちは彼らの動きをまねしたり、オニになったら必死に追いかけてしまいます。するとリーダーも年長者としての自覚が芽生え、捕まりそうで捕まらないような動きを見せるなど、子どもたちの動きのモデルとしての責任と

役割を自発的に担うようになっていくのです。育成母集団に関しては、大変だと思われたいまず続きません。でもいざやり始めると大人だつて楽しいから、必死になりますよ(笑)。ただ、最初から「さあやみなさい」ではなく、「一緒にやりましょう」という導入が効果的です。

佐藤 ちなみに大山さんはなぜバレーボールを始めたんですか？

大山 体が大きかったので、誘われて。それで練習を見に行ったら、先輩たちがキラキラして見えたんです。それまで運動してこなかったし、一人でいることが多かったので、みんなで一緒に何かをすることに憧れていたんでしようね。

佐藤 すぐとけ込めましたか。

大山 そこがいまでも不思議なんですよ。なんでいきなり厳しい練習に耐えられたのだろう、と。楽しかったのも大きいのですが、一番はバレーボールをすることでどんどん自信がついていったことではないか。それまでは本当に引っ込み思案だったのですが、大きな声を出して人前で試合をしたり、パスが50回できるようなったりと、徐々に自信がついたことが続けられた理由かもしれせん。

吉田 認められる機会がどれだけあるかは大事で、その機会がない

と自信をもてなくなってしまう子もいます。いまの時代は昔と比べてとくにその機会が少ないので、ACPなどを通してそのチャンスを提供すべきだと感じます。

佐藤 スポーツよりも遊びのほうが自信をつけやすいですから。

いまは我慢できない子が多くて、本当はやりたいたいけどうまくいかないとすねちゃったり。昔は遊びのなかでそういう葛藤を経験して、ななかで勉強だとそれが難しいし、スポーツも試合に出られないとつまらないけれど、遊びはみんなが主役になれるから。自信をつけたり、我慢を覚えたり、成功体験を得やすい。そういう部分ですごく意味があると思います。

しっかりとルールを守りつつ子どもとの距離を縮める

青野 連載2年目以降は佐藤先生に全国各地のスポーツ少年団を2回ずつ訪問していただき、訪問前と訪問後の2カ月でどう変わるのかという取り組みを行いました。指導者の方には、どんなアドバイスをされましたか。

佐藤 まずは遊びを教えることをストレスに感じないでください、と。「教えない方がいい」となると遊びではなくワークになるので。ご自身が昔やって楽しかった

ものを、10分間くらいやってみましよう、というアプローチですね。

青野 子どもに対してはどんなことを意識されましたか。

佐藤 自分から子どもたちのなかに入っていく距離を近づけることは意識しました。ただ、興奮しすぎてしまうと困るので、「話をちゃんと聞く」「遊びにもルールがあるの、ルールは必ず守る」という2つの約束をしました。それを守れなかったら、遊びに入れず外で見学させる。罰で走らせた上げるより、大好きなものを取ります(笑)。あとは初めて会う子たちなので、その子たちが何を求めているかがわからない。用意したものがフィットしないと、子どもがつまらなそうな顔をしているときがある。そこを見極めて臨機応変にアレンジするよう心がけました。2回目に訪問した際、「今度はいつ来るの?」と言ってもらえたりすると、成功したかな、と感じましたね。

青野 大山さんには「スポーツこころのプロジェクト」という事業の「スポーツ笑顔の教室」において、「夢先生」として各地の小学校を訪問していただきました。子どもたちと接する際に工夫されたことはありますか。

大山 バレーボールの楽しさ、すごさをわかってもらうために、実際にボールを打って見せました。床にバシンと打ったボールが跳ね返って天井に当たるのは、子どもにとつてインパクトが大きいみたいですね。

佐藤 体育館の天井に当たるんですか!? それはすごい!

青野 バレーボールの指導で遊びを取り入れることは?

大山 ボールを使った遊びはよくします。バレーボールつて楽しいな、と思ってもらうのが一番なので。ボールを投げて手たたくキャッチとか。バレーボールは本当に導入が難しいスポーツで、ゲームの楽しさをなかなか感じてもらえない。工夫が必要だなと思います。

多様な遊びで子どもを育てるACPのつ可能性

青野 小中学校の教員をさせていた経験を踏まえて、佐藤先生は学校現場における遊びの必要性をどう感じていますか。

佐藤 いまはみんな習い事としてのスポーツばかりで、子どもは学校くらいでしか遊べない。だからこそ学校では遊ばせてあげたい。でも結局は体育の授業で教わったことや、学校で準備されたものしか遊べていないんです。それっ

ですごく豊かじゃないと感じます。もっと多様な遊びをしてほしいし、子どもができてそうなことを学校で伝えていくのは大事だと思いますね。

吉田 東山スポーツ少年団でも遊びを取り入れてから、運動が苦手だった子が得意になってきていると感じることがあります。幼稚園児などを見ていると1年間での成長が大きくて、動きの多様化や洗練化が目に見えて表れます。

佐藤 欧米ってバレーボールをする人でも、それ以外のスポーツもしていますよね。

大山 競技を本格的に始めるのが遅いですね。15〜16歳からという選手が多いと思います。

佐藤 それまでいろんな経験をしているから強くなるという部分がある。日本では、バレーボールならバレーボール、サッカーならサッカーとサッカーで、途中でやめたら根性なし、という風潮がありますよね。それを急に変えるのは難しいと思いますが、遊びを活用することで、小学校低学年までは遊び中心、そこからそれぞれの競技に入っていく、という流れができていったらいいなと思います。

大山 子どものころに遊びを通して多様な動きを獲得していれば、もっとバレーボールが上手になっ

ていたかも。

吉田 剣道の稽古だけ見ているととくに目立たない子でも、遊びでは素晴らしい身のこなしができるケースがあつて、そういう子はやっぱり剣道も伸びるんです。遊びを見たほうが、(潜在的な能力が)見える場合もあります。

青野 最後に、ACPの今後の可能性について、皆さんのお考えをお願いします。

吉田 われわれが取り組んでいるのは、スポーツを通じた子どもの健全育成です。コミュニケーションをとれるようになる、嫌なこと

があつてもくじけないといったこ

とが、日々の生活を豊かにすることにつながると思う。大人がやらせたことが必ずしも続くわけではありません。楽しいから続けし、続けていたら知らないうちに体力が上がつて、できることも増えていく。そういういい連鎖をつくるうえで、子どもに対してACPがもたらす可能性は大きいと思います。

佐藤 最近は大人がよく、「子どもが遊ばなくなった」と言いますが、実は大人が子どもを遊ばせなくしている。いまの子は遊ぶ環境

も時間もありません。ポータブル

ゲームを買い与えると黙ってやっているから、大人にとってはそれほど都合いいわけです。もちろん体力や社会性を身につけることも重要ですが、僕は大人が奪った「遊び」というおもしろいものを、子どもに返す責任があると思っています。そして、ACPがその役割を担えると信じています。

が変わったし、自分の人生がキラ

キラしたと感じています。その一番の理由は、仲間や友達ができたこと。本当にバレーボールと出会ってよかつたし、スポーツが苦手だった私でも、やってみたら楽しくて続けられた。苦手だから引いてしまうのではなく、飛び込めて飛び込んでほしいし、飛び込める環境を、私たち大人でつくっていったらと思っています。



「幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム」を発行しました!

すでに発行されたACPの基本コンセプトを踏襲しつつ、おもに幼児〜小学校低学年の子どもたちを指導する際の理論や実践について、詳細に解説しています。本プログラムは、デジタルブックとして日本体育協会のホームページから閲覧できます(ACP総合サイト:3月下旬公開)。そして、平成27年度からは、全国各地で座学と実技による講習会を開催し、普及啓発を図ります。



<コンテンツ>

- ①スポーツ少年団における幼児加入条件の整備
- ②幼児期における身体活動・運動の意義
- ③運動遊びプログラムの紹介
- ④幼児の指導法・指導技術
- ⑤実践事例

※ ACP総合サイトでは、全国各地の実践事例、実際の遊びの様子や指導法・指導技術について動画などを用いて紹介しています。

※講習会の開催計画については、今後、日本体育協会のホームページにてご案内します。